セイレムへのレイシフトを終えて幾ばくかの時が経ち、サーヴァント達は平和になった世界で各々自由に過ごしていた。元々あるはずのなかった余生だ、ゲーム機で遊ぶ者、知己の者と共に過ごす者、鍛錬を行う者、様々であった。食堂では豊かになった食料を自由に使い料理を楽しむ者もいた。サンソンもそのうちの一人だ。ロビンが二日酔いに苦しみながら水を求め食堂に入ると、彼は古びたノートを片手に何かを作っているようだった。彼のつけている茶色のエプロンは長く使われていた為か少し汚れが目立っていた。サンソンはロビンに気がつくと菜箸を片手に微笑んで言った。

「あ、ロビンフッド、おはよう。ってもうお昼過ぎだけれど」

「……あー、ドウモ……」

「聞いたよ。作家達と酒盛りしたんだって？」

「…ハハ、誘われちまってねえ。まあ誘われたら断る訳にも行きませんし」

「あ、二人ともやっほー」

その時ちょうどマスターが食堂に入って来て二人に挨拶をする。そして厨房から漂ういい匂いに気がつくとマスターはサンソンに近寄って楽しげに話しかける。

「サンソン、今日は何を作ってるの？」

「こんにちはマスター、今日はアヒージョというものを作っています」

「アヒージョ！美味しそう」

「もしよかったら一緒に食べましょう。それとオニオンスープも作るので、そちらも」

マスターは一瞬体を強張らせ、そしてオニオンスープ、と繰り返した。

「どうかしました？もしかして玉ねぎは苦手でしたか？」

「…ううん、そうじゃないよ。楽しみだなぁ」

マスターは怪訝そうな表情を浮かべるサンソンに誤魔化すように首を振り、じっとサンソンが玉ねぎを切る様子を見ていた。トン、トン、とロビンが知るより遅めな包丁のリズムが響いている。ロビンはコップの水をガブガブと飲み干してから常備されているスティックパンを齧り、二日酔いで痛む頭を押さえながらさっさとコップを洗って部屋に帰ろうとする。

「あ、ロビン。もしよかったら君もどうだい？オニオンスープは二日酔いにも効くんだ」

厨房を出ようとしたところで背中にそう声をかけられ、ヒリヒリと痛み出した心臓に苛立ちながら笑顔を作って振り返った。

「いいえ、アンタが作ったんですからアンタが食べたらいい」

サンソンはでも、と追い縋ろうとするが、それじゃあ、と会話を遮って食堂を出た。頭が酷く痛かった。医務室に行って薬でも取りに行こうかと思ったが、消毒液の匂いと白いベットはどうしても彼を思い出してしまうから、やめた。

『――もしよかったら君もどうだい？オニオンスープは二日酔いにも効くんだ』

先程サンソンに言われた言葉を思い出す。前の彼も、二日酔いに効くのだと言ってよくオニオンスープを作ってくれた。

体の中心から温まるようなその優しい味は彼だけのものだ。

ロビンはそう自分に言い聞かせて、未だ痛みを訴え続ける心臓を握りつぶしてしまいたいと思った。

俺の恋人が死んだ

◆1◆

一人の男が死んだ。名前はシャルル=アンリ・サンソン。フランス生まれの処刑人で、サーヴァントとして現界して、そして人間として死んだ。くそ真面目で背負い込みがちな男だった。いつも暗い顔で、口を開けば自虐か王家を賞賛する事しか言わなかった。情事の後のピロートークでさえその調子でロビンはよく辟易したものだ。けれど、目覚めた時に彼の体温が無いことを思い知らされるぐらいなら、いくらでも聞いてやりたかったと今頃になって思う。

「急に呼び出してごめんね。来てくれてありがとう」

「いえいえ。二人揃って一体どうしたんです？」

セイレムへのレイシフトを終えて少し経った時、ロビンはマスターに大事な話があると呼び出された。向かった先、ダヴィンチ工房に待っていたのはマスターとダヴィンチの二人だった。気まずげな笑みを浮かべながら謝るマスターを軽く制して尋ねると、あのね、と前置きされた後に、もうどこにもいなくなってしまったその男の名を告げられる。

「あのね、ロビン。サンソンのことなんだけど」

マスターのその言葉に勝手に目が見開いた。まさか彼の名が出てくるとは思わなかった。ロビンと世界を隔てるようにまとわりついていた薄い膜が急速に剥がれていき全てが明快になった気分だった。

「……セイレムから帰ってきても、サンソンは、……戻って来なかったよね」

マスターの言葉に口元が痙攣した。うん、とかはい、とか、たったそれだけの単語が出てこなくて、ロビンはただ首を縦に振った。

その光景を一瞬たりとも忘れた事はなかった。あの日、首の骨がひしゃげて動かなくなった彼を処刑台から降ろして穴を掘り、首に赤黒い縄の跡が浮かぶ彼をそっと横たえたのは自分だった。誰にも手出しはさせなかった。誰一人触れるなと叫んだ。突然のロビンの行動に戸惑うマスターたちに、こいつは俺の恋人だったのだと言った。周りに気取らせないようにと頼まれて仲が悪い振りをしていたが、こいつは俺と思い合っていたのだと訴えた。驚きを隠せない表情を浮かべて動きを止めたマスター達を他所に贖罪を終えた彼からコートを脱がせ、窮屈そうなブーツを脱がせて毛布をかけた。首元のアスコットタイを解いて少しでも息がしやすいように襟首のボタンを二つ外した。そしてついこの前まで自分の背中に手を回して縋っていたはずの冷たく固くなった彼の両手を腹の上で組ませ、自分を写すと優しく細められる瞳を半開きになっていた瞼でそっと隠した。全てを終えて改めて見てみると、彼はゾッとするほどに綺麗だった。まるで今にも息を吹き返しそうな程に、皮肉にも今まで見てきたどんな彼より生々しかった。

あの日からその光景を何度も夢に見た。何度も何度も彼は死んで、何度も何度も自分は同じことを繰り返した。今も、少し目を瞑れば冷たい彼の体の感触を思い出せる程だ。

彼はあの地で死んで、そのままカルデアには戻って来なかった。ダヴィンチ曰く、特異点の中でも異常な環境下で受肉した状態で亡くなった為、彼はサーヴァントとしての現界を果たせなくなってしまったのではないかと言う事だった。マスターは最後まで納得しようとせず、食事もせず諌める声さえ無視して

何度も再召喚をしようと試みた。半狂乱になったマスターの肩を叩いてもういいでしょうと止めたのはロビンだった。
「……分かってますよ。冷たくなったアイツを土に埋めたの、俺ですし」
ロビンの淡々とした口調にマスターは気まずげに眉を寄せたが、それに言及する事はなく話を続ける。
「……それでね、結局サンソンの再召喚は出来ないままで。登録してある霊基も形だけで、サーヴァントとして現界するのはもう無理なんだと思われてたんだけど……」
マスターは歯切れ悪くそう言うと、ちらりとダヴィンチの方を見た。ダヴィンチはマスターの視線を受けて説明を引き継いだ。
「……召喚できる方法が見つかった」
「は？」
酷く掠れた声が出た。マスターはピクリと体を跳ねさせたがそれに構っている余裕はなかった。サンソンを、召喚できる。そう言われただけで醜く膨れ上がった愛欲はあっという間にロビンを支配した。
「どう言う事です？」
ロビンが尋ねると、ダヴィンチは手元にある資料をパラパラとめくりながら深くため息をつく。
「ロビンフッド、……今から言う事をよく聞いてくれ。それを全部聞いた上で、」
「前置きとかいらねえんでさっさと言ってください」
視界でチリリと音を立てて火花が跳ねる。取り繕うこともせずに低い声でそう急かすと、ダヴィンチはしばらく告げるべき言葉を口の中で持て余していたが、スゥ、と小さく息を吸うと重い口を開いた。
「7つの特異点から回収した聖杯の他に余剰に見つかった聖杯があるだろう。その聖杯の魔力を借りて彼を現界させるんだ。シミュレーションは上手くいった。シャルル=アンリ・サンソンも問題なくカルデアのサーヴァントとなる。けれどそうなったら、」
ダヴィンチは一瞬躊躇ってから言った。
「今までカルデアにいたシャルル=アンリ・サンソンの記録は上書きされ、二度とカルデアで共に過ごした彼は戻ってこない。しかし現状サンソンを再召喚する為の手立てはそれ以外にほぼ無い。カルデアとしてはサンソンを迎えいつでも再召喚出来る状態にしていざという時に備えたいと思っている。けれど、カルデアに尽力し続けてくれた君にはちゃんと伝えておくべきだと思ったんだ」
ロビンはマスターを見た。マスターは随分疲れたような顔で相変わらず気まずげな表情を浮かべていた。しかし瞳の奥には怯えと、揺るぎない決意があった。ロビンとサンソンは人理焼却が行われてから初期に召喚された事もありマスターとは仲が良かった。特にサンソンは人類最後の希望として弱さを見せる事を許されない彼女に寄り添い、弱音を吐く傷だらけの彼女の背中をさすった。サンソンはマスターの心の支えであった。だからこそ、彼女は再召喚出来ないと分かった時は半狂乱になった。また会えるという希望が打ちくだかれ、目の前で首を吊った彼の死の重みが彼女の折れかかっていた心を完全に折ってしまったのだ。それ以来マスターは夜な夜な帰らない彼を探し彷徨うようになった。あの狂った村で見たものが、受肉した彼らの首が折れる音、消えずに風に晒され揺れる血の気の失せた体が脳裏に焼き付いて離れないのだという。ダヴ